Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

発達心理学研究
2008，第19巻，第2号，108-120

原　著

「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析

山田　みき
（広島大学大学院教育学研究科）

岡本　祐子
（広島大学大学院教育学研究科）

本研究では，近年重要な視点として取り上げられている「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティから青年理解を試みた。研究Ⅰでは，大学生175名を対象にして，先行研究を参考に「個」と「関係性」の視点を含む新たなアイデンティティ尺度を作成した。因子分析の結果，3因子15項目からなる「個」としてのアイデンティティ尺度と，3因子13項目からなる「関係性」に基づくアイデンティティ尺度が構成された。しかし，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティとを完全に分離することは難しいことが示された。研究Ⅱでは，大学生295名を対象にして，作成した2つの尺度の妥当性と信頼性を検討した。作成した尺度を用いてクラスタ分析を行ったところ，4つのクラスタが抽出された。その後，対象者のうち20名を対象にして，対人関係に関する質問項目からなる半構造化面接を行い，4クラスタの実際の対人関係に見られる相違を検討した。結果の整理にはKJ法を用い，最終的に各クラスタ3～5個のカテゴリーが抽出された。それらを比較・検討した結果，青年期のアイデンティティにおける「個」の側面は，自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れること，「関係性」の側面は，他者を自己とは独立した存在として認識し，親密な関係を築くことができる傾向として表れることが明らかになった。

【キー・ワード】「個」としてのアイデンティティ，「関係性」に基づくアイデンティティ，青年期，対人関係，大学生

問題と目的

アイデンティティとは，Erikson（1950/1977）によって提唱された概念であり，「自己の単一性，連続性，不変性，独自性の感覚を意味する」（小此木，2002）。アイデンティティの確立は，青年期の重要な心理社会的課題とされ，これまでに青年期を対象として多くの研究が積み重ねられてきた。

この中で，アイデンティティを「個」と「関係性」の側面から捉える試みがなされている。この動向はJosselson（1973）に始まり，彼女は，女性のアイデンティティ発達には，男性とは異なり関係性が重要な意味を持つという見解を示した。その後，アイデンティティ発達における男女の差異を示す研究がなされ（例えばHodgson & Fisher, 1979；高橋，1988），「個人内領域（男性）－対人関係領域（女性）という2分法」（杉村，1998）でアイデンティティを理解する図式が導かれた。しかし今日では，男女の差異を強調するのではなく，性別にかかわらずアイデンティティを捉える際に共通する要素としての「関係性」の観点を含むことの有用性が示され始めている（Archer, 1993；杉村，1999）。このことは，アイデンティティ形成における「関係性」の観点が，より人間の根源的なものとして取り入れられるようになったことを表している。

この立場に立つ代表的な研究に，Franz & White（1985）が挙げられる。彼女らは，Erikson（1950/1977）の唱えた精神分析的個体発達分化の図式の第Ⅵ，Ⅶ段階の説明が不足していることを指摘した。そして，一方でErikson（1967/1982）が内的空間説を提唱していることを踏まえ，性差についてのEriksonの考察を再検討し，アイデンティティ発達に愛着の観点を加える必要があると結論付けた。彼女らは，特に成人期のアイデンティティ発達に着目し，親密性と世代性も他の段階の課題と同様に発達の初期から存在するというEriksonの考えに基づき，アイデンティティ発達における愛着の先駆的プロセスについての精緻化の必要性を述べた。まず，Eriksonによる各段階の記述を検討し直し，精神分析的個体発達分化の図式の第7行（他の段階での世代性の感覚）と第7列（世代性の先駆）を埋め，最終的に個体化経路と愛着経路からアイデンティティ発達を捉える「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」を提唱した。このモデルでは，既存の課題のうち第Ⅵ，Ⅶ段階は愛着経路に組み込まれ，愛着経路の他の段階の課題と，個体化経路の第Ⅵ，Ⅶ段階の課題が新たに想定された。なお，第Ⅰ，Ⅷ段階の課題は，両経路で同じものが設定されている。Franz & White（1985）によると，この2つの経路は「独立してはいるが相互に関係をもつ」要素であり，「より糸」と表現されている。本邦においても，岡

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

本（1997）が類似した立場からの見解を示している。彼女は，特に成人期のアイデンティティを捉える際に，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」の2つの観点の導入が有用であるとし，この2つの観点は同等の価値を持ち，互いに影響を及ぼしあう，アイデンティティを支える両輪であると述べている。つまり，アイデンティティにおける「個」の側面と「関係性」の側面は，別の特質を持つ発達経路，つまり個体化経路と愛着経路を経て発達すると考えられる。しかしその後，これらの理論についての研究は乏しく，実証的データによる検討が求められている。

なお，上記2つの研究では，成人期のアイデンティティに焦点が当てられているが，従来からアイデンティティの確立が課題とされる青年期についても，「個」と「関係性」の観点の導入は有用であると考えられる。本邦において杉村（1998）が，青年期におけるアイデンティティ形成を「個」と「関係性」から捉える試みを行っているが，アイデンティティ形成を他者との意見の相互調整による模索の過程として捉えており，他者との関係の在り方に焦点が当てられている。しかし，青年期におけるアイデンティティの形成・確立を，それまでの様々な同一化対象を，能動的に取捨選択し秩序付け統合する過程（小此木，2002）と捉えるならば，アイデンティティを捉える「関係性」の観点とは，個人の持つ，他者と関係を結ぶ力を表すものでなければならないと考えられる。これに関して，鑪・山本・宮下（1984）は「対人的－心理的な距離を保つ能力」という言葉を用いている。アイデンティティを確立する，つまり自己表象を明確で納得のいくものにしていくためには，他者表象を自己表象に取り込んだり，そぐわないものを切り捨てたりする必要がある。アイデンティティを捉える「関係性」の側面には，上述した内的・外的に他者と関係を結び，時には切り離すことのできる能力が含まれることが求められる。

以上のことから，本研究では次の2点を目的とする。①青年のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉える尺度を作成する（研究Ⅰ）。②作成した尺度の妥当性と信頼性を検討し，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティのバランスから青年を分類する。さらに，見出された各群の特徴を，他の心理的変数と対人関係の在り方の点から検討する（研究Ⅱ）。

なお，上述の先行研究を踏まえ，本研究では「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティを次のように定義する。「個」としてのアイデンティティとは，「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」（Franz & White, 1985）の個体化経路に沿って発達し，自己の能力に対する信頼感を基盤に，個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面である。「関係性」に基づくアイデンティティとは，「生涯発達に関する複線（two-path）モデル」（Franz & White, 1985）の愛着経路に沿って発達し，自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者と関係を築く能力を獲得し，他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面である。これまでの先行研究でも示されてきたように，この2つの側面は互いに補完し合う関係にあり，両者が絡み合いながらアイデンティティの形成・確立がなされると考えられる。

また，研究Ⅱにおいて，対人関係の在り方に着目した理由として，以下のことが挙げられる。まず，鑪ほか（1984）の言及から，青年のアイデンティティの形成・確立が対人関係の文脈で捉えやすいことが考えられる。さらに，アイデンティティの様相を対人関係の観点から検討した研究（杉村，1998など）や，アイデンティティと対人関係との関連を検討した研究（金子，1995など）が散見されることから，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティのバランスによって，対人関係の在り方に相違が見られることが予測される。つまり，鑪ほか（1984）で言われる「対人的－心理的な距離」を，青年がどのように保ち，もしくは保ちにくく，それについてどのように認識しているのかという点に，相違が見られると考えられる。さらに，そのような青年の認識は，語りという質的なデータによりあらわれやすく，ひいては青年の実相に近づくことが可能になると考えられる。

研　究　Ⅰ

目　的

Franz & White（1985）をもとに，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉える新たなアイデンティティ尺度を作成する。

方　法

対象者と調査期日　A大学の学生165名（男性90名，女性75名），平均年齢21.1歳（$SD=1.53$）。2005年1月に授業内で集団実施し，回収率は96.5％。

質問紙の構成　フェイスシート（性別，年齢，学年），「個」としてのアイデンティティ項目群（80項目，4件法），「関係性」に基づくアイデンティティ項目群（80項目，4件法）。

項目選定の手続き　Franz & White（1985）を参考に設定した課題に基づき作成した選定基準（主要部分をTable 1に示す）に従い，先行研究（中西・佐方，1983；宮下，1987；谷，1996, 2001；下山，1992；井梅，2001；中尾・加藤，2004）を参考に，項目を収集・作成した。なお，Franz & White（1985）からの変更点として，第Ⅰ，Ⅷ段階の課題も「個」と「関係性」の側面それぞれに設定したことが挙げられる。これは，基本的信頼感は，母親

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

Table 1　*「個」としてのアイデンティティ項目群と「関係性」に基づくアイデンティティ項目群の項目選定基準の一部と項目例*

	「個」としてのアイデンティティ			「関係性」に基づくアイデンティティ		
	課題	項目選定の基準	項目例	課題	項目選定の基準	項目例
第Ⅰ段階	「個」に対する基本的信頼感	心の最も深いところでの自己肯定。希望に支えられる。	・私は，幸せになる価値のある人間である。	自己を取り巻く世界に対する基本的信頼感	他者をはじめとする自分を取り巻く環境に対する肯定・信頼感・安心感。世の中に対する信用。	・自分が困ったときには，周りの人々からの援助が期待できる。
第Ⅱ段階	自律性	外的な命令や禁止の内在化。自分の力で決断，実行ができる。自分の行いに対する責任感。	・私は，決断する力が弱い。*	恒常性	他者という存在の認識。無力感や孤独感の脅威からの解放と，愛情対象との密接な関係性の獲得。	・人間関係は，常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる。*
第Ⅲ段階	自主性	積極的に物事に取り組む。自己統制の確立。自我理想と超自我のスムーズな形成。	・一つの目的のために，積極的に物事を進めていくことができる。	遊戯性	心理的に独立した存在として他者を認識できる。他者の思考や感情，意図に気づく。	・私は，他者は異なる考えを持っているということを感じても不安になることはない。
第Ⅳ段階	勤勉性	他に働きかけ，統制し，自己の世界に作り変えていく技術獲得のプロセス。有能感の獲得。勉強や課題などに集中し継続して取り組む。	・私は，自分の仕事をうまくこなすことができる。	共感・協力	第Ⅲ段階の状態に加え，相互性にも気づく。他者が自律的で自分と相互依存的関係を持つ存在であるという認識。	・他者と対等に接し，協力して物事を行うことができる。
第Ⅴ段階	アイデンティティの確立	自己の一貫性・連続性，社会的存在である「個」としての自分の意識化。時間的展望を有する。	・現在の自分は，過去の自分の上に築き上げられているという感覚がある。	相互性・相互依存	自己の斉一性（空間における自己の定位）が可能。対人関係に対するより精緻な理解。行動と内面の統合。	・人は互いに支え合いながら生きていくものである。
第Ⅵ段階	職業及びライフ・スタイルの模索	社会的存在としての自己を認識し，人生の方向付けを行おうとしている。またそのことに対して真剣に取り組んでいる。	・人生設計をきちんと立てて，今後の生活を送っていきたいと考えている。	親密性	異性や特定の他者と親密な関係を持つことができる。自分を見失わずに他者と関わることができる。	・誰かに個人的な話をされると，私は当惑してしまう。*
第Ⅶ段階	職業及びライフ・スタイルの確立	安定した生活を送れており，またその自信がある。自分の役割への自覚，誇り。	・自分の役割というものを意識することがある。	世代性	世話をする立場になることに，ある程度の自信を持っている。世代感覚を覚えつつある。	・私は，後輩のめんどうをよく見る。
第Ⅷ段階	「個」としての人生の統合	これまでにしてきた仕事や働きに対する満足感。自分の人生としての納得。自己の過去と直面し，内的な生き生きとしたものに高める。	・私は，悔いのない人生を歩んでいる。	関係性の視点からの人生の統合	これまで出会ってきた人々との関係を肯定的に捉えようとする。あるがままの過去経験に直面し，それらが現在を支え，決定しているものとみる。	・昔よくけんかをしたりあまり仲良くなかった人も，一人の人として受け入れることができる。

注．項目例の項目末の*は逆転項目であることを示す。

と母親を通じての世界に対する信頼感と自己の存在そのものに対する信頼感を含むというEriksonの記述から，信頼感や統合性についても「個」と「関係性」の2つの側面を有すると考えられたためである。また，Eriksonと同様に生涯を通じて発達し続けるものとしてアイデンティティを捉えているFranz & White (1985) に倣い，段階ごとに項目を収集した。選定基準と項目との対応について，筆者以外の心理学専攻の大学院生2名により，妥当性が確認された。選定基準と項目を提示し，不適当と判断された項目については，内容や項目表現の修正を行った。なお，修正の必要があると判断されたのは，「個」としてのアイデンティティ項目群で6項目（一致率は92.5％），「関係性」に基づくアイデンティティ項目群で8項目（一致率は90.0％）であった。

結　果

分析ソフトは，SPSS11.0を用いた。

因子分析　まず，回答の60％以上が1か4に偏っている項目を反応偏向項目として除外した。次に尺度別に主因子法による因子分析を行い，固有値や因子の解釈のしやすさ，共通性が.30以上という基準を設け，尺度を構成した。最終的に採用した項目は因子負荷量が，.55以上のものとした。なお，因子間に相関関係があることが予想されたため，プロマックス回転を用いて因子を抽出した。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

「個」としてのアイデンティティ尺度（以下，「個」尺度と略記）では，「自己への信頼感・効力感」，「将来展望」，「自律性」の3因子15項目の因子構造が得られた（Table 2）。下位因子の信頼性係数はそれぞれ，α=.85, .81, .79であり，尺度全体の信頼性係数はα=.85であった。「関係性」に基づくアイデンティティ尺度（以下，「関係性」尺度と略記）では，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」，「他者との適度な距離感」，「関係の中での自己の定位」の3因子13項目の因子構造が得られた（Table 3）。下位因子の信頼性係数はそれぞれ，α=.90, .70, .67であり，尺度全体の信頼性係数はα=.83であった。以上より，一部やや低い値も見られるが，両尺度とも尺度全体としては，十分な内的整合性をもつことが示された。

相関分析　「個」尺度と「関係性」尺度との関連を検討するために，2つの尺度の下位因子と尺度得点間の相関分析を行った（Table 4）。その結果，尺度得点間に，r=.57の1％水準で有意な相関が認められた。また，「個」尺度得点は，「関係の中での自己の定位」と（r=.52），「関係性」尺度得点は，「自己への信頼感・効力感」と「自律性」と（それぞれr=.53, .55），比較的強い相関を持つことが示された。両尺度の下位因子間で特に相関が強かったのは，「自律性」と「関係の中での自己の定位」であった（r=.60）。

考　察

因子分析の結果，それぞれ3因子から構成される「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度が作成された。

「個」尺度の第1因子「自己への信頼感・効力感」は，5項目中3項目が第Ⅰ段階に対応する項目であり，自己への基本的信頼感が，青年期の「個」としてのアイデンティティの中核にあることが示唆された。第2因子「将来展望」は，5項目中3項目が第Ⅵ段階に対応する項目であり，青年期の次の段階である成人期の課題への取り組みが，「個」としてのアイデンティティの構成要素であることが示された。これに関しては，本研究の対象者が大学生，つまり詳細に分類すると青年期後期にあたる人々であったことが影響している可能性が考えられる。第3因子「自律性」は，5項目中3項目が第Ⅱ段階に対応する項目であり，残りの2項目も青年期以前の段階に対応する項目である。このことは，青年期以前の発達段階の課題の中で，特に自律性が青年期のアイデンティティ形成にも重要な役割を果たすことを示す。これは，Erikson（1967/1982）の青年は「人生の道の一つを，自由なる同意をもって意思決定する機会を求める」という青年期と幼児前期（第Ⅱ段階）の類似性への言及と一致する。

次に，「関係性」尺度の第1因子「自己を取り巻く世界

Table 2　*「個」としてのアイデンティティ尺度の因子分析結果*

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己への信頼感・効力感」（α=.85）				
私は，多くのことに対して自信を持って取り組むことができる（Ⅰ）	.83	-.07	.02	.65
私は，自分が役に立つ人間であると思う（Ⅳ）	.78	.03	-.10	.57
私は，自分が好きだし，自分に誇りをもっている（Ⅴ）	.73	.00	.00	.53
私は，きっとうまく人生を乗り越えられるであろう（Ⅰ）	.66	-.04	.03	.43
自分の考えに従って行動することに自信を持っている（Ⅰ）	.58	.20	.05	.54
第2因子「将来展望」（α=.81）				
将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている（Ⅴ）	.02	.80	-.01	.65
将来の職業（専業主婦も含む）について，具体的に考えている（Ⅵ）	-.10	.73	-.02	.46
人生設計をきちんと立てて，今後の生活を送っていきたいと考えている（Ⅵ）	-.02	.66	-.02	.42
私は，目的を達成しようとがんばっている（Ⅳ）	.08	.61	.01	.44
今後，どんな風に生活していくかを考えている（Ⅵ）	.09	.57	.05	.41
第3因子「自律性」（α=.79）				
私は，決断する力が弱い*（Ⅱ）	-.01	.04	.70	.48
私は，自分の判断に自信がない*（Ⅱ）	.03	.05	.70	.52
私は，誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている*（Ⅲ）	-.11	.02	.66	.38
私は，物事を完成させるのが苦手である*（Ⅳ）	-.03	.03	.64	.40
何かしたあとで，それが正しかったかどうか心配になることが多い*（Ⅱ）	.14	-.16	.61	.44
寄与率（%）	30.25	12.51	6.06	
因子間相関　F1		.52	.48	
F2			.18	

注．項目末の*は逆転項目であることを示す。
　項目末の（ ）は，その項目を選定した際の対応する段階を示す。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

Table 3 *「関係性」に基づくアイデンティティ尺度の因子分析結果*

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」（α＝.90）				
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる（Ⅰ）	.87	-.06	.02	.74
これまでに出会った人々によって，今の自分が支えられていると感じる（Ⅷ）	.83	-.18	.09	.65
私は人間関係を大事にしており，それによって多くのものを得ている（Ⅴ）	.76	.13	-.10	.62
これまで私が築いてきた人間関係は，私にとって価値のあるものである（Ⅷ）	.68	.08	.07	.53
私がこれまでに関わりをもった人々は，私によい影響を与えてくれた（Ⅷ）	.67	.00	-.13	.44
友人関係は，比較的安定していると思う（Ⅴ）	.63	.20	.03	.52
自分が困ったときには，周りの人々からの援助が期待できる（Ⅰ）	.60	.00	.10	.39
第2因子「他者との適度な距離感」（α＝.70）				
私は時々，周囲の人や物事から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる*（Ⅱ）	.10	.69	.04	.56
私は批判に対して敏感で傷つきやすい*（Ⅳ）	-.19	.67	.17	.53
閉じこもって全く人と話をしたくなくなるときがある*（Ⅳ）	.15	.62	-.14	.39
第3因子「関係の中での自己の定位」（α＝.67）				
集団内で，私はちゅうちょすることなく，自ら正しいと思うことを表明できる（Ⅵ）	.14	-.14	.69	.45
人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと，自分の意見を主張するのにためらいを覚える*（Ⅵ）	-.05	.10	.66	.50
他者と一緒に何か物事を行うとき，私はよく受身的になってしまう*（Ⅲ）	-.04	.07	.56	.34
寄与率（%）	32.54	13.40	5.24	
因子間相関　F1		.30	.19	
因子間相関　F2			.48	

注．項目末の*は逆転項目であることを示す。
項目末の（ ）は，その項目を選定した際の対応する段階を示す。

Table 4 *「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度の下位因子間相関*

	「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」	「他者との適度な距離感」	「関係の中での自己の定位」	「関係性」に基づくアイデンティティ尺度得点
「自己への信頼感・効力感」	.41**	.35**	.40**	.53**
「将来展望」	.28**	.00	.16*	.18*
「自律性」	.18*	.41**	.60**	.55**
「個」としてのアイデンティティ尺度得点	.39**	.34**	.52**	.57**

注．*$p<.05$　**$p<.01$

への信頼感と関係性の価値付け」は，第Ⅰ，Ⅴ，Ⅷ段階に対応する項目から構成されており，発達段階全体に渡る「関係性」に基づくアイデンティティの課題を集約的に反映していると考えられる。第2因子「他者との適度な距離感」は，3項目中2項目が第Ⅳ段階に対応する項目であった。この段階の課題は「共感・協力」であり，項目選定基準として，自分と相互性を持つ心理的に独立した存在として他者を認識することが挙げられている。他者の意思や思考と自分の意思や思考とを混同しないことにより，自分が周囲から取り残されていると感じるのではなく，相互関係を持つことが可能な対象として周囲の他者を捉えることができることと考えられたため，第2因子を「他者との適度な距離感」と命名した。第3因子「関係の中での自己の定位」は，3項目中2項目が第Ⅵ段階に対応する項目であった。この段階の課題である「親密性」の項目選定基準には，異性との関係を築けることと「自分を見失わず他者と関わることができる」ことが挙げられている。項目にある意見の表明や主張を可能にするのは，他者との関係の中で自己を位置づけ，他者の存在に自己の存在が脅かされないことと考えられたため，第3因子を「関係の中での自己の定位」と命名した。成人期についてErikson（1967/1982）が，「すでに確立された活力的な力強さのゆえに，二人は，意識や言語や倫理の点ではじめて類似した存在となり，しかも成熟した成人としてのお互いの違いを率直に認め合うようになれる」と述べていることから，真の親密性とは，他者に自らのアイデンティティを参与させながらも，互いの違いを認めることができることと捉えられる。本研究の結果から，アイデンティティの形成・確立と重なって，親密性の獲得に向かう取り組みも始まっていると考えられ，このことは先行研究においても示唆されている（伊藤，1983；高橋，1988）。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

以上のことより，青年期における「個」としてのアイデンティティは，自己の能力に対する肯定的な意識や将来に向けての取り組みを中心として構成されていること，「関係性」に基づくアイデンティティは，他者をはじめとする自己を取り巻く世界への信頼感や，自己と他者の相互性への十分な気づき，親密性への取り組みを中心として構成されていることが明らかになった。また，収集した項目のうち最終的に採用されなかった項目の多くは，両尺度共に第Ⅶ，Ⅷ段階のものであった。このことより，具体的なレベルの課題や人生の統合に向かう課題は，青年期においては取り組まれず，意識されていないと考えられる。

相関分析の結果，両尺度得点間に比較的強い相関が認められたことより，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティとは，青年期においては完全に分離しえないことが示された。これに対して，成人期のアイデンティティは，ケア役割など社会的役割の影響が反映され，「個」と「関係性」が2つの軸として区分される（岡本，1997）。つまり，親として育児に関わることや上司として部下の指導に当たることなどは，成人期の主要な役割であり，これらのケア役割は，成人期における「関係性」に基づくアイデンティティの典型的なものと考えられる。しかし，役割が一定でない青年期，特に大学生においては，アイデンティティにおける「個」と「関係性」の様相はより融合的であると考えられる。なお，特に「自律性」と「関係の中での自己の定位」とは強い関連を持ち，また，この2つの因子はそれぞれ，「関係性」尺度得点と「個」尺度得点とも比較的強い関連をもつことが示された。従って，自律や他者との関係の中での自己の位置づけにおいては，より「個」と「関係性」が融合し，相補的な関係にあることが考えられる。

本研究ではFranz & White（1985）の理論の実証的検討を第一の目的としたため，アイデンティティにおける「個」と「関係性」の側面を当初から別のものと想定したところに限界点がある。Franz & White（1985）も述べているように，個体化と愛着は「独立してはいるが相互に関係をもつ2つの要素」であり，まずは理論に沿った尺度を作成し，探索的な検討を行うことには意味があると考えられる。今後，理論の精緻化と並行して実証研究を重ねることにより，より実相に近づくことのできる尺度の作成が期待される。

研　究　Ⅱ

目　的

研究Ⅰで作成した尺度の妥当性と信頼性を検討し，尺度得点を用いて対象者を分類する。信頼性に関しては，内的整合性と再検査信頼性について検討する。妥当性に関しては，以下の予測に基づき分析を行う。①同一性混乱尺度と負相関をもつ（併存的妥当性の検討），②加齢に伴い両尺度得点が上昇する，③自尊感情尺度と正相関をもつ，④特性不安尺度と負相関をもつ（以上が構成概念妥当性の検討）。また，探索的に，尺度得点を用いて見出された各群の特徴を，他の心理的変数との関連と，対人関係の在り方に関する語りから明らかにする。

方　法

対象者と調査期日　A，B大学の学生295名（男性167名，女性128名）。平均年齢19.8歳（$SD=1.49$）。面接調査の対象者は，調査への協力に応じた学生のうち，後述する4つのクラスタからそれぞれ5名ずつ計20名（男性9名，女性11名）を，男女比を考慮した上でランダムに選出した。平均年齢20.0歳（$SD=1.03$）。質問紙調査は，2005年5，6月に授業内で集団実施し，回収率は95.2％。面接調査は2005年7月下旬～9月上旬に実施。

質問紙の構成　フェイスシート（性別，年齢，学年），「個」尺度（15項目，4件法），「関係性」尺度（13項目，4件法）。併存的妥当性を検討するために，砂田（1979）の同一性混乱尺度（34項目，3件法）を用いた。構成概念妥当性の検討には，清水・今栄（1981）の特性不安尺度（20項目，4件法）と，山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（10項目，5件法）を用いた。なお，これら3つの尺度は，既存のアイデンティティ尺度の作成において妥当性の検討のために用いられており（谷，1996，2001；宮下，1987），また構成概念妥当性の検討のために加えた2つの尺度に関しては，過去のアイデンティティ研究において，アイデンティティの発達・成熟と関連がある変数として用いられている（鑪ほか，1984）ことから採用した。

再検査法の手続き　調査実施の1カ月後に，A大学の一部の学生を対象に再検査を実施した。対象者の照合のために，学籍番号の記入を求めた。分析対象者は，50名（男性21名，女性29名）。平均年齢は20.0歳（$SD=1.33$）。

面接調査の手続き　個別に1回90～120分の半構造化面接を行った。調査開始前に面接承諾書に署名を求め，録音や結果の公開についての同意を得た上で，内容を全て録音し逐語記録を作成した。調査場所は，A大学は大学附属の心理臨床センターの面接室，B大学は学生相談室であり，いずれも第3者の出入りのない場所であった。

面接調査の質問内容　対象者の対人関係の在り方や，それに対する評価・考え方などを幅広く聴取するために，以下の5項目を尋ねた。①周囲にいる関わりのある他者との関係の在り方とそれへの評価。②最も関わりの深いと思う他者との関係の在り方とそれへの評価。③他者との関わりの中で困難であった出来事とそれへの対

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

応。④小学校入学前，小学校，中学校，高校の各時期で関わりの深かった他者との関係や思い出とそれへの評価。⑤一人でいる時の過ごし方。

面接調査データの整理の手順　逐語記録から各対象者の対人関係に関する発言を文章単位（1～3文程度）で抜き出し，それぞれのクラスタの特徴を抽出するために，クラスタごとにKJ法（川喜田，1967）により，類似した発言をグルーピングしカテゴリー化した。抜き出した発言数は，クラスタ1から順に184個，163個，197個，174個であった。抜き出した発言を1枚のカードに1つずつ記入し，それらを机上にランダムに並べ，記入してある発言を何度も読み，意味の近いと考えられるカードを収集してグループ化した（第1段階）。次に，収集したカード全体を見渡し，それらに共通するテーマ（そこに表れている心理的な意味）を1つのグループに1つつけた。この作業を全てのグループに対して行い，各クラスタの下位カテゴリーを構成した。下位カテゴリーを記述したカードに対し，同様の作業を実施し（第2段階），さらにもう1段階同様の作業を行い（第3段階），最終的なカテゴリーを構成した。この時点での各クラスタのカテゴリー数は3～5であり，これらを各クラスタの特徴を表すカテゴリーとした。以上の作業を，筆者と臨床心理学を専攻する大学院生6名の計7名で行った。後日，最終的に抽出されたカテゴリーの妥当性を検討するため，筆者が作成した評定マニュアルにより，それぞれのカテゴリーの特徴を提示し（KJ法第2段階の時点でのカテゴリーも提示），全発言数の7割の発言を，臨床心理学を専攻する大学院生2名が独立して再分類した。評定者間の一致率は，クラスタ1から順に81.0％，78.7％，86.6％，88.7％であり，十分な妥当性が示された。なお，評定が一致しない項目は，評定者間で協議の上分類を行った。

結　果

分析ソフトはSPSS11.0を用いた。

信頼性と妥当性の検討　内的整合性と再検査信頼性の観点から，尺度の信頼性を検討した。「個」尺度の信頼性係数は，研究Ⅰではα=.85，研究Ⅱではα=.86であり，「関係性」尺度の信頼性係数は，研究Ⅰではα=.83，研究Ⅱではα=.79であった。研究Ⅱにおける下位因子の信頼性係数は，「自己への信頼感・効力感」α=.84，「将来展望」α=.83，「自律性」α=.68，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」α=.86，「他者との適度な距離感」α=.50，「関係の中での自己の定位」α=.66であった。

再検査法による信頼性の検討では，1回目と2回目の得点の相関係数を算出した結果，「個」尺度では，尺度得点r=.87，「自己への信頼感・効力感」r=.83，「将来展望」r=.83，「自律性」r=.79であった。「関係性」尺度では，尺度得点r=.71，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」r=.68，「他者との適度な距離感」r=.71，「関係の中での自己の定位」r=.77であった。

作成した尺度の妥当性を検討するために，「個」尺度得点，「関係性」尺度得点，下位因子得点と，同一性混乱尺度，特性不安尺度，自尊感情尺度の尺度得点との相関係数の算出，及び「個」尺度得点と「関係性」尺度得点の学年差を検討した（Table 5）。

Table 5　*「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度の下位因子得点と尺度得点の全体と学年ごとの平均値と，他の尺度との相関*

	全体	1年生	2年生	3年生	4年生	F値（多重比較）	同一性混乱尺度	特性不安尺度	自尊感情尺度
「自己への信頼感・効力感」	2.39 (0.66)	2.37 (0.66)	2.26 (0.64)	2.44 (0.67)	2.60 (0.70)	*n.s*	-.53**	-.57**	.73**
「将来展望」	2.61 (0.71)	2.45 (0.70)	2.43 (0.65)	2.77 (0.68)	2.88 (0.88)	6.38 (1<2<3<4)	-.51**	-.35**	.44**
「自律性」	2.59 (0.56)	2.49 (0.48)	2.53 (0.63)	2.69 (0.54)	2.53 (0.60)	*n.s*	-.61**	-.59**	.55**
「個」としてのアイデンティティ尺度得点	7.59 (1.53)	7.31 (1.36)	7.22 (1.53)	7.90 (1.50)	8.01 (1.81)	4.75 (2<3)	-.69**	-.63**	.72**
「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」	3.02 (0.61)	2.98 (0.59)	2.99 (0.65)	3.01 (0.61)	3.20 (0.54)	n.s	-.46**	-.30**	.37**
「他者との適度な距離感」	2.53 (0.69)	2.61 (0.69)	2.51 (0.63)	2.53 (0.72)	2.25 (0.75)	n.s	-.51**	-.64**	.40**
「関係の中での自己の定位」	2.39 (0.68)	2.18 (0.65)	2.33 (0.71)	2.51 (0.67)	2.56 (0.59)	4.09 (1<3)	-.51**	-.43**	.41**
「関係性」に基づくアイデンティティ尺度得点	7.94 (1.41)	7.77 (1.31)	7.84 (1.47)	8.07 (1.42)	8.01 (1.33)	*n.s*	-.69**	-.65**	.55**

注．（ ）内は標準偏差を示す。
**p<.01

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

相関分析の結果，全ての変数間に1％水準で有意な相関関係が認められた。「個」尺度においては，「自己への信頼感・効力感」と自尊感情尺度間と，「個」尺度得点と自尊感情尺度間で，$r=.70$を越える強い相関係数が示された。「関係性」尺度においては，$r=.70$を越える高い相関係数は得られなかった。

次に，1年生から4年生までのデータを用いて両尺度の尺度得点と下位因子得点について分散分析を行った結果，「個」尺度では，「将来展望」($F(3,290)=6.38$, $p<.01$)，「個」尺度得点($F(3,290)=4.75$, $p<.01$)において有意差が，「自律性」($F(3,290)=2.36$, $p<.10$)において有意差傾向が認められた(Table 5)。下位検定(Tukey法)の結果，2年生と3年生の間を境に有意に得点が上昇していることが示された。「関係性」尺度についても，同様の手続きを取り学年差を検討した結果，「関係の中での自己の定位」($F(3,290)=4.09$, $p<.01$)において，有意差が認められた。下位検定(Tukey法)の結果，1％水準で1年生より3年生の方が高得点であることが示された。

クラスタ分析　研究Ⅰで「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティの完全な分離が難しいことが示されたことから，尺度得点の高低の組み合わせでの分類は妥当ではないと考えられたため，クラスタ分析を用いて青年の分類を試みた。作成した尺度の下位因子得点を標準化し，非階層法によるクラスタ分析を行った結果，4つのクラスタが抽出された(Figure 1)。クラスタ1($n=86$)は，「自律性」，「他者との適度な距離感」，「関係の中での自己の定位」が平均より高く，「自己への信頼感・効力感」，「将来展望」，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」が低い群であり，「関係性」優位群と命名した。クラスタ2($n=73$)は，全ての因子得点が平均値より高い群であり，統合群と命名した。クラスタ3($n=61$)は，全ての因子得点が平均値より低い群であり，未熟群と命名した。クラスタ4($n=75$)は，クラスタ1と逆の得点配置を示す群であり，「個」優位群と命名した。

各クラスタの特徴　各クラスタに属する対象者の特徴を明らかにするために，特性不安尺度の合計得点を従属変数とした分散分析を行った(Table 6)。その結果，クラスタの主効果が認められた($F(3,290)=77.04$, $p<.01$)。引き続き下位検定(Tukey法)を行ったところ，「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に1％水準で有意な差が認められた。なお，「関係性」優位群と「個」優位群の間には，有意差傾向が認められた。自尊感情尺度についても同様に分析を行ったところ，クラスタの主効果が認められた($F(3,290)=58.28$, $p<.01$)(Table 6)。引き続き下位検定(Tukey法)を行ったところ，「関係性」優位群と「個」優位群の間以外に1％水準で有意差が認められた。

この結果から，統合群は，他のクラスタに比べて特性不安が低く自尊感情が高く，精神的健康度が最も高いことが示された。これとは反対に，未熟群は，他のクラスタに比べて特性不安が高く自尊感情が低く，精神的健康度が最も低いことが示された。「関係性」優位群と「個」優位群は，自尊感情，特性不安共に，統合群と未熟群の中間に位置した。

各クラスタの語りの特徴　KJ法により抽出された複数のカテゴリーについて，具体的な発言例を交えて詳細に検討した(Table 7)。

「関係性」優位群では，KJ法の結果，第1段階で34個，第2段階で15個，第3段階で5個のカテゴリーが抽出

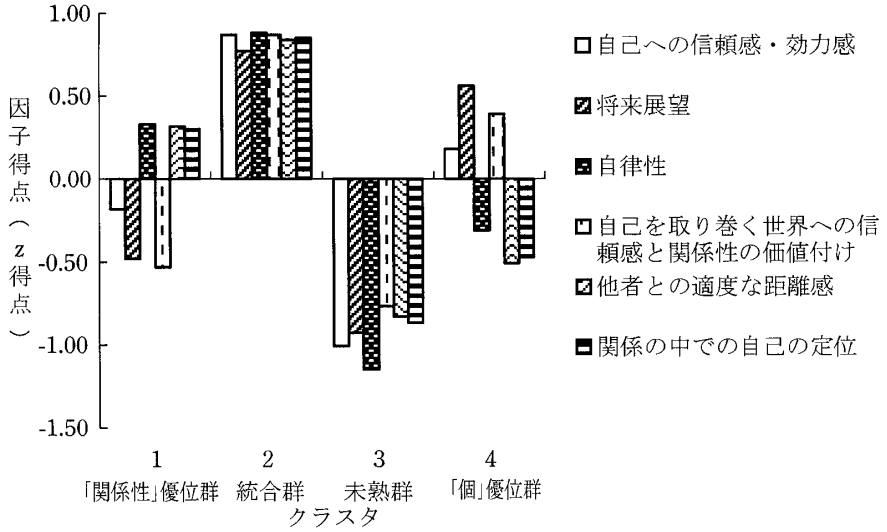

Figure 1　*クラスタ分析の結果*

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

Table 6 *クラスタごとの特性不安尺度，自尊感情尺度の平均値と標準偏差*

クラスタ	特性不安尺度得点	自尊感情尺度得点
1「関係性」優位群	46.85(6.36)	31.89(6.11)
2 統合群	40.66(7.31)	38.53(4.94)
3 未熟群	58.92(7.32)	24.60(6.18)
4「個」優位群	49.64(7.20)	31.45(6.85)
*F*値	77.04**	58.28**
(多重比較)	(2<1,4<3)	(3<4,1<2)

注．( ) 内は標準偏差を示す。
**p<.01

Table 7 *KJ法により抽出されたカテゴリーと発言例*

クラスタ	カテゴリー	発言例	該当者
1「関係性」優位群	他者への信頼感	・相手（恋人）を尊重しても大変なことにはならない。(B) ・やっぱ一番信頼して，一番理解してくれるのは親。(C)	A, B, C, E (4人)
	相互尊重	・(恋人とは）基本的にお互いの意見や考えをちゃんと言う，全部。(B) ・(友人とは）理解を示すような感じでお互いの違いを否定することはない。(C)	A, B, C, D (4人)
	表面的な対人関係志向	・あまり連絡しない家族。(B) ・周りはすごい本当に仲良しって感じに見えるけど，そんなに深く仲良くならない，私は。(E)	B, C, D, E (4人)
	他者からの被影響性	・(他者に）あんまり干渉されたくない。自分の生活の中に入ってきそうな時は面倒くさいなと思う。(D) ・わざわざ自分のリズムを崩す必要はない。(E)	A, B, C, D, E (5人)
	自己と他者の融合	・相手を相手として，一人の人として認めてるわけじゃなくて，自分の延長みたいな感じに捉えてしまう。(A) ・(恋人と）一緒にいると2人とも主体性がなくなる。(B)	A, B, C (3人)
2 統合群	関係への満足と安心感	・(仲間の存在は）自信になる。自分のこと分かってくれる人がそれだけいるっていう意味で。(H) ・居心地がいい。サークルは大事。(J)	F, G, H, I, J (5人)
	相互に独立した他者の認識	・(親友とは）性格全然違うから全然合わないと思ったけど意外と。(F) ・ライバルじゃないけどいい刺激っていうか。負けたくないけど，でも仲がいい。尊敬じゃないけど大事，いい友達。(J)	F, G, H, I, J (5人)
	自他の視点の分化と他者への配慮	・(友人が傷つかないようにという意図を持ち，友人の）機嫌を損ねないようにしようと。(G) ・(自分は先入観をもたれやすく）友達の方がそういう抵抗を持ってるから，最初のうちは優しめに接する。(I)	G, I, J (3人)
	周囲への不満と自己内緩和	・お父さんが我儘。でも今は落ち着いているからいい。(G) ・(サークルの仕事をしていて）居心地がいい，求められてる感じ。だけど私だけやってるんじゃないかと，たまに不安に思う。(J)	F, G, I, J (4人)
	一人でいることへのアンビバレントな気持ち	・人といると楽しいけど，やっぱり疲れるところもあって。(G) ・(親友を）積極的に欲しいとは思わないけど，いないのはマイナスかな。(J)	G, H, I, J (4人)
3 未熟群	親密な関わりの拒否・回避	・私は友達にしても何にしても，仲が悪くなったら連絡を断つ。(L) ・僕の周辺世界って5人ぐらいで回ってます。(O)	K, L, M, N, O (5人)
	関わることへの不安	・人と話す時も不安。余計なことしないか，不愉快にさせないかと。(K) ・あの時なんであんな風に言ったんだろうとか，結構考えて一人でもやもやする。(M)	K, L, M, (3人)
	不安定な家族関係	・やっぱり家族は重い。(L) ・勉強しろと言われ，反抗期の延長みたい。(O)	K, L, M, N, O (5人)
	特定の他者への信頼感	・やっぱり実家は安心する。(N) ・(サークルの仲間は）全然連絡取らなくても大切。(O)	K, L, M, N, O (5人)
4「個」優位群	関係の深まりへの拒否感	・本当に表面的。個人的なことはしゃべらない。(R) ・その場その場での人付き合い。(T)	P, Q, R, S, T (5人)
	他者への信頼感	・人には言いづらいことでも，この人なら言える。(R) ・実家に帰った時に，やっぱり家族の中にいるのはいいなと思う。(S)	P, Q, R, S, T (5人)
	対人関係の広がりを志向	・ネットワークを形成したい。(Q) ・いっぺんに友達が増えた。たくさんの人と友達になるのも好き。(S)	Q, S (2人)

注．該当者欄のアルファベットは事例番号を示す。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

された。「他者への信頼感」は，友人や家族などの他者への信頼感や，信頼感を伴った他者との関係を表す発言が含まれる。「相互尊重」は，主に友人との関係において，互いの意見を伝え合い相違を認めようとすることや対人関係上の問題に積極的に取り組む態度を表す発言が含まれる。「表面的な対人関係志向」は，他者との関わりにおいて，深く入り込まず論理的な思考によって対処しようとすることを表す発言を含む。「他者からの被影響性」は，他者との関係の中で他者からの影響を拒否・排除しようとすること，集団に属することへの苦手意識などを表す発言を含む。「自己と他者の融合」は，主に両親や恋人との関係における他者との融合感や密着を表す発言を含む。自己と融合した他者像を求めるため，実存的な孤独感を抱いていることも語られた。

統合群では，KJ法の結果，第1段階で30個，第2段階で12個，第3段階で5個のカテゴリーが抽出された。「関係への満足と安心感」は，周囲の他者や環境に対する満足感やそこで感じる安心感を表す発言を含む。特定の他者との関係のみならず，幅広い他者との関係も言及された。「相互に独立した他者の認識」は，相互尊重や対人関係への内省的態度など，他者を相互に独立した存在として認識し，関わっていることが示される発言を含む。「関係性」優位群の「相互尊重」に比べると，互いの違いを認めた上で信頼関係を結んだり相手を受容したりすること，さらに生産的なライバル関係を結ぶことも含まれている。「自他の視点の分化と他者への配慮」は，他者と関わる際に他者の視点や見方にも目を向け，時には配慮して関わることを表す発言を含む。なお，統合群であっても，他者の目や視点を気にするという青年期的な特徴は見られること，この自他の視点の分化に基づき，他者への配慮がなされることが示された。「周囲への不満と自己内緩和」は，家族や周囲の他者に対しての不満や批判とそれを自分の中で緩和していることを示す発言を含む。「関係への満足と安心感」に含まれる肯定的な感情が語られる一方で，不満や批判などの否定的な感情も同時に語られた。「一人でいることへのアンビバレントな気持ち」は，一人でいることへの肯定・否定の両方の思いが語られた発言を含む。関わりを持つことのいいところと悪いところを並列して語り，結果的には両方ある現状に満足していることが語られた。

未熟群では，KJ法の結果，第1段階で32個，第2段階で24個，第3段階で4個のカテゴリーが抽出された。「親密な関わりの拒否・回避」は，他者に対する不信や関わりへの苦手意識と強い拒否感のために，関係が深いものにならないよう撤退する，もしくは関係を切るという方法を用いていることが示された発言を含む。「関わることへの不安」は，行動的には「親密な関わりの拒否・回避」と類似しているが，その根底にある他者との関わりへの不安が強く表された発言を含む。他者を傷つける不安や他者に傷つけられる不安，他者に対する攻撃的な思いが表れている。「不安定な家族関係」は，家族との密着した関係やネガティブな関わりを表す発言を含む。青年期に至っても，他者との関わりの大半を家族が占め，それが家族以外の他者との関係にも影響を及ぼしていることが語られた。「特定の他者への信頼感」は，関わる他者の人数は少なく，また関係の中身も具体的には語られないが，他者に対する肯定的な感情が示された発言を含む。尊敬する他者との関係に多く見られるような，極端な信頼感が特徴的であった。

「個」優位群では，KJ法の結果，第1段階で31個，第2段階で16個，第3段階で3個のカテゴリーが抽出された。「関係の深まりへの拒否感」は，表面的で浅い対人関係を築いているという発言や，仲の良い他者との関わりの深さを会う頻度や時間などの物理的な基準で説明した発言を含む。他人に関心がない，プライベートなことは話さないなど，関わりへの拒否が示された。「他者への信頼感」は，限定的ではあるが，他者との安定した信頼関係を表す発言を含む。大学入学後の家族との関係の変化への言及が多く，家族との関係を客観的に捉え，肯定的な感情を持つに至っていることが語られた。また友人との関係での相互理解も，統合群と類似し，自分とは異なる他者の意見を受け入れることが可能であることが示された。「対人関係の広がりを志向」は，浅い付き合いでの関係の広がりを志向することを示す発言を含む。

なお，全ての群に共通して，他者への信頼感に関わる発言が見られた。詳細に見ると，信頼を向ける対象の質には相違が見られるが，他者への信頼感は，全ての青年に共通して見られる資質であることが示された。

考　察

信頼性と妥当性の検討　内的整合性と再検査信頼性の検討により，両尺度の安定した信頼性が確認された。下位因子の信頼性係数において，一部低い値も認められたが，研究Ⅰの結果も踏まえ，一応の信頼性を有すると考えられた。

両尺度得点，下位因子得点と，他の尺度得点との相関分析，及び両尺度得点の学年差の検討の結果，両尺度の妥当性が確認された。なお，自尊感情尺度との相関分析の結果，「個」としてのアイデンティティの方がより高い相関を示した。このことから，「関係性」に基づくアイデンティティよりも，「個」としてのアイデンティティの方が，個人の自己価値に関する変数とは，強い関連を持つと考えられる。これは，本研究で想定した，アイデンティティを捉える視点としての「個」と「関係性」の違いが示された結果とも考えることができる。また，両尺度の学年差の結果からは，全体的に学年が上がるほど尺度得点も上昇することが示された。下位検定の結果，有

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

意差の多くは，1，2年生と3年生の間で認められており，これは青年期においてアイデンティティが形成されやすいのが大学3年から4年にかけてであることを示した加藤（1989）を支持する。特に，「将来展望」や「関係の中での自己の定位」など，より発達後期に顕在化すると考えられる要素については，大学生の間での発達的な差が認められると考えられる。一方，「自己への信頼感・効力感」，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」，「他者との適度な距離感」には有意差が認められなかったことからは，信頼感というより発達早期に重要となる要素については，大学生の間では発達的な差が認められないことが示唆された。

クラスタ分析　作成した尺度の下位因子得点を用いて行ったクラスタ分析の結果，4つのクラスタが得られた。クラスタによる特性不安尺度得点と自尊感情尺度得点の違いから，全ての下位因子が平均より高い統合群において，特性不安が低く自尊感情が高いという結果が得られ，精神的健康度が高いことが示された。また，全ての下位因子が平均より低い未熟群においては，統合群と逆の結果が得られた。「個」優位群と「関係性」優位群の間には，明確な差は示されず，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティの両方が高いことが，精神的健康の高さに関連すると考えられる。

対人関係の在り方に見られる各クラスタの特徴　クラスタごとに対人関係に関する語りを整理した結果，「個」と「関係性」のバランスによる対人関係の在り方における差異が認められた。語りに見られた「個」と「関係性」それぞれの特徴について，以下に述べる。

まず，「個」の側面が平均より低い未熟群と「関係性」優位群に共通して見られた特徴として，自己と他者の融合感からくると考えられる関わることへの不安が挙げられる。未熟群の「関わることへの不安」と「関係性」優位群の「自己と他者の融合」に含まれる発言を見ると，自分の存在や行動を他者のそれと重ねてしまう傾向が認められ，「関係性」優位群では，「他者からの被影響性」を表す語りも見られた。小此木（2002）は，青年期においては，周囲への同一化した状態から「その価値観を自分のものにするプロセス」が進行すると述べている。このことからも，周囲への同一化が強い状態に自他の融合感が生じ，「関係性」優位群では，「他者からの被影響性」に示されるように他者の影響を拒否・排除しようとすると解釈される。また，「個」の側面が平均より高い統合群と「個」優位群に共通して見られた特徴として，幅広い他者との関係を求める傾向が見られた。関係の質の面では2群間に差異が認められ，「個」優位群の一部の対象者においては，対人関係の広がりを自分の利益と考えていることも示されており，他者との関係自体よりも，そのことが個人としての自分にどのように役立つかに価値を見出していることが考えられる。

次に，「関係性」の側面が平均よりも低い未熟群と「個」優位群に共通して見られた特徴として，親密な関わりや関係の深まりへの拒否が挙げられる。未熟群の「親密な関わりへの拒否・回避」と「個」優位群の「関係の深まりへの拒否感」に含まれる発言を見ると，他者と関係を築く「対人的－心理的な距離を保つ能力」（鑪ほか，1984）が未熟であり，他者との関係を浅いものに止める，もしくは関係そのものを回避するという手段を用いることが示唆された。一方で，「関係性」の側面が平均より高い統合群と「関係性」優位群に共通して見られた特徴として，自己と他者を相互に独立した存在として認識していることが挙げられる。これは，Erikson（1967/1982）が成人期の特徴として述べている，自らのアイデンティティを相手に参与させ，互いの違いを尊重することが可能な状態に近づいていると考えられる。また，統合群では，関係への満足と安心感が語られる一方で，その中で感じる不満についても述べられ，他者との関係をうまく築きつつ，個人としての見方や意見を持つこともできると考えられる。つまり，「個」としてのアイデンティティも「関係性」に基づくアイデンティティも共に成熟した在り方であると言える。

以上のように，対人関係の在り方において，「個」の側面は，自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れること，「関係性」の側面は，他者を自己とは独立した存在として認識し，親密な関係を築くことができる傾向として表れることが明らかになった。しかし，「関係性」優位群にも「個」優位群にも，それぞれ「個」と「関係性」の側面を示唆する発言も存在した。「関係性」優位群に見られた「他者からの被影響性」に見られる他者の影響の拒否や排除に，どの程度「個」の側面が反映されているのか，「個」優位群に見られた「他者への信頼感」がどの程度「関係性」の側面を反映しているのかという点については，面接調査の内容を「個」にも焦点を当て，検討を重ねる必要がある。

今後の課題

本研究では，Franz & White（1985）に依拠し，青年のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉えることを目的とした。しかし，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」に明確に区分することは難しく，特に数量的な分析では2つの要素を完全に分離することはできなかった。そのため，本研究では，概念的構成に疑問が残る結果となった。今後，「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティに関する理論的・実証的研究のさらなる積み重ねが必要と考えられる。なお，「関係性」尺度は，再検査信頼性が「個」尺度に比べて低かったこと，下位因子の信頼性係数に低いものが

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

あったことから，尺度の安定性には検討の余地が残る。また，研究Ⅱの面接調査では対人関係のみを扱ったため，「個」の側面がより表れる領域についても，検討していくことが求められる。加えて，本研究では，面接調査のデータを十分に分析し考察することができなかった。今後，面接調査のデータを詳細に分析し，「個」と「関係性」のバランスによる対人関係場面での違いについて，より詳細に検討していく必要があると考えられる。

文　献

Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. In J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity* (pp.75-99). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Erikson, E. H. (1977/1980). *幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ*（仁科弥生，訳）．東京:みすず書房．(Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.)

Erikson, E. H. (1982). *アイデンティティ：青年と危機*（岩瀬庸理，訳）．東京：金沢文庫．(Erikson, E. H. (1967). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.)

Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.

Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. (1979). Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, **8**, 37-50.

伊藤研一．(1983)．青年期における親密さ対孤立の危機と自我同一性．*東京大学教育学部紀要第23巻*，東京大学，東京，325-330.

井梅由美子．(2001)．青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の試み．*人間文化論叢第4巻*，お茶の水女子大学，東京，311-320.

Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 3-52.

金子俊子．(1995)．青年期における他者との関係のしかたと自己同一性．*発達心理学研究*，**6**，41-47.

加藤　厚．(1989)．大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究．*心理学研究*，**60**，184-187.

川喜田二郎．(1967)．*発想法：創造法開発のために*．東京：中央公論社.

宮下一博．(1987)．Rasumussenの自我同一性尺度の日本語版の検討．*教育心理学研究*，**35**，253-258.

中西信男・佐方哲彦．(1983)．青年期における同一性の発達――エリクソン心理社会的段階目録（EPSI）の改訂．*昭和57年度文部省教育研究開発に関する調査研究報告書（関西青年心理研究会）：幼児・生徒の心身発達の状況と学校教育への適応について*．pp.5-21.

中尾達馬・加藤和生．(2004)．“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討．*九州大学心理学研究第5号*，九州大学，福岡，19-27.

岡本祐子．(1997)．*中年からのアイデンティティ発達の心理学*．京都：ナカニシヤ出版.

小此木啓吾．(2002)．*現代の精神分析：フロイトからフロイト以後へ*．東京：講談社.

清水秀美・今栄国晴．(1981)．STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成．*教育心理学研究*，**29**，348-353.

下山晴彦．(1992)．大学生のモラトリアムの下位分類の研究：アイデンティティの発達との関連で．*教育心理学研究*，**40**，121-129.

杉村和美．(1998)．青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し．*発達心理学研究*，**9**，45-55.

杉村和美．(1999)．現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達．岡本祐子(編)，*女性の生涯発達とアイデンティティ*（pp. 55-86）．京都：北大路書房.

砂田良一．(1979)．自己像との関係からみた自我同一性．*教育心理学研究*，**27**，215-220.

高橋裕行．(1988)．同一性と親密性の危機の解決における性差：自我同一性地位のRasmussenのEISによる併存的妥当性の検討．*教育心理学研究*，**36**，210-219.

谷　冬彦．(1996)．基本的信頼感尺度の作成．*日本心理学会第60回大会発表論文集*，310.

谷　冬彦．(2001)．青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成．*教育心理学研究*，**49**，265-273.

鑪幹八郎・山本　力・宮下一博．(1984)．*アイデンティティ研究の展望*．京都：ナカニシヤ出版.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子．(1982)．認知された自己の諸側面の構造．*教育心理学研究*，**30**，64-68.

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Developmental Psychology (JSDP)

Yamada, Miki (Graduate School of Education, Hiroshima University) & Okamoto, Yuko (Graduate School of Education, Hiroshima University). *Individuality-Based Identity and Relatedness-Based Identity: An Analysis of the Characteristics of Adolescent Interpersonal Relations.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2008, Vol.19, No.2, 108-120.

The purpose of this study was to understand adolescents in terms of individual-based identity and relatedness-based identity. In Study 1, university students answered a questionnaire regarding their identity. Based on an analysis of these data, a scale was constructed consisting of 15 items related to individuality based identity and 13 items related to relatedness based identity. Differentiation of these two aspects of identity was shown to be difficult. In Study 2, university students completed the questionnaire derived from Study 1, and the scale's validity and reliability were confirmed. A semi-structured interview containing questions related to interpersonal relations was conducted with 20 of the participants from Study 2, to clarify differences between the 4 groups of items formed by cluster analysis. The "KJ" (Kawakita Jiro) Method was used to organize the interview data, and revealed 3-5 categories. The results indicated that in individuality based identity one has little assimilation with others, and seeks wide interpersonal relationships. In contrast, in relatedness based identity one perceives others as independent from oneself and has the ability to from intimate relationships.

【Key Words】 Individuality based identity, Relatedness based identity, Adolescence, Interpersonal relations, University students

2006. 5. 29 受稿, 2008. 2. 12 受理

NII-Electronic Library Service